オンライン日本語クラスにおける効果的なフィードバック

―中級レベルの文法クラスにおける教材配信システムの活用例を通して―

許　　明　子

要　旨

本研究では中級レベルの日本語学習者を対象に実施された双方向型オンライン日本語文法クラスにおいて、教材配信システム（NUCT）を活用して自律学習を促す教師のフィードバック活動に焦点を当てて実践報告を行う。本実践ではZoomミーティングを用いて毎週双方向型のオンライン授業を実施しつつ教材配信システムの「小テスト」「課題」「フォーラム」の機能を利用して、授業前の予習、授業中のアクティビティ、授業後の復習が有機的に連携するように工夫しながらフィードバックを行った。その結果、学習者は学習者自身の文法知識に関するメタ言語を活用して自律的に学習に取り組むようになったことが分かった。コロナ禍におけるオンライン日本語クラスにおいても学習意欲を失わず、能動的な自律学習が行えたことは今後のオンラインによる日本語学習に示唆を与えるものであったと評価できる。

キーワード

フィードバック活動、メタ言語知識、自律学習、教材配信システム

1．はじめに

2020年度は春学期も秋学期も新型コロナウイルス感染症拡大の影響を受けて、すべての日本語クラスがオンラインによって開講されることになった。オンラインによる日本語クラスは様々な実践が行われており、筆者も従来の対面型の授業においてMoodleやmanaba等による教材配信システムを利用して学習者の自律学習を支援する実践を行ってきた。特に、中級

レベルの文法教育において予習や復習の促進、自律学習を支援するツールとして Moodle を利用した実践（鈴木他2012）、manaba を利用した実践（許他2015）を行った経験を有しており、対面型の日本語クラスにおいても教材配信システムを導入し活用することによって、教室学習が活性化する等の有効性について述べてきた。しかし、2020年度は教室における対面型の授業は行えず、オンラインのみの授業となったことにより、従来のオンライン日本語クラスとは異なる新たなオンライン日本語学習の在り方を模索せざるを得ない状況となった。

そこで、筆者が担当した NUPACE 日本語コース 6 レベル（以下、NP 6）の文法クラスでは、Zoom ミーティングを用いて行った双方向型の日本語の授業を行いつつ、e-Learning システム NUCT（Nagoya University Collaboration and course Tools）を導入し、学習者の自律学習を支援するための活動を行った。本研究ではその活動内容について報告し、オンライン日本語クラスにおける教材配信システムの有効な利用方法、学習者の支援方法について提案する。

2．NP 6 文法クラスの概要

NP 6 で学ぶ学習者は名古屋大学短期交換留学プログラムに参加している留学生であり、中級中期レベルの日本語力を有している。2020年度春学期の NP 6 文法クラスの概要は以下の通りである。

・主教材：許明子・宮崎恵子著『中級レベルアップ日本語文法』（2013）くろしお出版
・学習項目：第13課～第24課[1]
・授業時間：１コマ／週、15週間
・授業方法：Zoom ミーティングによる双方向型の授業
・学習者：漢字圏、非漢字圏の学生の混在

中級レベルの学習者はより自然な日本語の表現の習得やコミュニケー

ション能力の向上を目標としており（許他2009）、その目標を達成するためには既習文法項目の運用力の向上が不可欠である。しかし、2020年度の授業はオンラインのみで実施されることになったため、オンライン上において教師もしくは学習者同士のインターアクションが行える環境を作りつつ、授業外の自律学習が行えるような e-Learning システムの有効な利用が必要であった。NP 6 レベルにおける文法クラスでは学習者がすでにメタ言語知識を有していることから、間接的フィードバックを使って学習者が自分のエラーに気づき修正できるように NUCT の機能を活用した。また、学習者がエラーを自己訂正し、正しい文法項目を内在化することによって、自動化が進み、運用力の向上につながるという習得モデルに基づいてシラバスを立てた。

本授業は中級レベルの日本語学習者を対象としている点、またオンライン上のバーチャル教室学習である点から、文法項目の明示的な指導が有効である立場に立ち（白畑2015）、NUCT を利用した第二言語習得モデルを導入した。白畑（2015：vi）の明示的指導の役割に焦点化した第二言語習得モデル（図１）を導入し、既習文法項目の「意識的気づき」（noticing）」「意識的理解（comprehension）」「内在化（internalization）」「自動化（automated knowledge）」を活性化することを目指して、NUCT の「課題」「フォーラム」「小テスト」の機能を活用して実践を行った。次章から活動の詳細について述べる。

図１　明示的指導の役割に焦点化した第二言語習得モデル

（白畑2015：vi より引用）

３．NUCT の「課題」「フォーラム」を活用したフィードバック

第二言語習得の研究において直接フィードバックと間接フィードバック

の有効性については様々な観点から論じられてきた。直接フィードバックは肯定証拠や「正しい形」を示すこと、間接的フィードバックは否定証拠を示すことであるが、どちらが効果的な学習の支援につながるかは議論が続けられている。直接フィードバックは教師から学習者に明示的にエラーを訂正したりメタ言語説明を与えたりする方法で、間接的フィードバックは学習者が自分自身の気づき等を通して仮説を検証し、内的プロセスを深め、正しい形を内在化するのを助ける方法である（大関2015：120）。学習者の目標言語に対するメタ言語の知識や学習項目によって効果的なフィードバックが異なっており、第二言語習得の研究において様々な教育現場で検証されている。

前述したように、NP 6 文法クラスに参加する学習者は中級レベルの日本語能力を有しており、日本語の文法項目についてメタ言語知識を持っていることから、学習者が自分自身の文法仮説を検証しながら内的プロセスを深めることができると考え、間接的フィードバックを取り入れた。

本実践では NUCT の「課題」の機能を使って当該の学習項目の予習を行った。毎週の授業の前日までに各課のテキストにある「文作り」をワードファイルにまとめて「課題」にアップロードする（図１）。

図１　NUCT 課題提出画面

教師は授業開始前に学習者の「文作り」の課題を確認し、学習項目の理解度を確認して授業を行うことができた。教師は授業中に学習項目の「意識的気づき」「意識的理解」を促し、学習者は学習項目のエラーに気づいて自己訂正ができるようにフィードバックを行った。教師は明示的な訂正を避けて、ターゲット文法項目に関連する情報を提供し、学習者自身のメタ言語知識でエラーの訂正ができるように暗示的な訂正を行った。学習者は課題を提出する前に主教材である『レベルアップ日本語文法』の文法説明を読んで練習問題を解いており、意識的理解を深めている段階で授業に参加していたため、授業では学習項目の内在化に集中することができた。「課題」に提出した「文作り」のエラーに対する気づきが得られ、エラーを訂正する際も学習者自身のメタ言語知識を活用し、能動的に自己訂正を行っていることが分かった。2020年度春学期は受講者が4名で少人数であったため、学習者一人ひとりの課題を丁寧に確認しながらフィードバックを行うことができた。しかし、2020年度秋学期は受講者が9名となり、Zoomで行う授業中に丁寧なフィードバックを行うのは難しい状況となったため、NUCTの「フォーラム」の機能を使って授業開始前にフィードバックを行った（図2）。

NUCTの「フォーラム」は教師だけではなく、授業に参加する学習者同士にも公開されているため、学習者の文作りの内容や教師によるフィードバック内容を学習者同士が共有することができる。そこで、秋学期はNUCTの「フォーラム」を利用し、直接フィードバックを取り入れてエラー訂正を促した。その後、授業では学習者自身の気づきによる自己訂正ができるように間接的フィードバックを取り入れた。授業実施前にNUCTを利用して直接フィードバックを行っていたことから、授業中の間接的フィードバックがより効果的に行えるようになった。

図２　NUCT フォーラム画面

４．NUCT の「小テスト」を活用した学習項目の内在化

毎週学習している文法項目の内在化、学習内容の定着を図るため、毎回の授業開始時に前回の授業内容について小テストを実施した。NUCT の「小テスト」機能を使って自動採点の問題５問（図３）と短文形式で回答する文作りテスト５問（図４）の２種類の小テストを実施した。自動採点問題は回答後に正誤がすぐに開示され、文作りテストは教師による採点で開示される。小テスト実施後、即時に採点を行い、フィードバックを行った。

図３　小テスト自動採点選択式問題

図４　小テスト文作りテスト回答画面

小テストの実施時間は10分を上限として実施したが、ほとんどの学生は５分程度で回答ができており、小テストの実施、採点、フィードバックを含めて10分程度で終了していた。NUCT の「小テスト」を利用したことで短時間に効果的な即時フィードバックを行うことができ、前回の学習項目の復習や定着度が確認できた点で、学習項目の内在化を助けることが可能であった。従来の対面式の授業では紙媒体の小テストを実施していた

が、オンライン授業になったことによって、NUCT を活用して対面式授業同様の学習支援を行うことが可能になったと考える。

5．まとめ

本研究では中級レベルの学習者を対象に開講された文法クラスにおいて、e-Learning システム NUCT の活用を中心に実践報告を行った。新型コロナウイルス感染症の感染拡大を受けて、2020年度は春学期も秋学期もオンラインのみの日本語教育を実施することになったが、今まで開発してきたオンライン教材を効果的に活用し、新たな習得モデルを提案する契機になったと考えている。Zoom によるバーチャルな教室環境において、如何に対面受業に近い学習環境を整えるかが大きな課題だったが、本実践では双方向参加型の授業を実施すると同時に NUCT を活用して直接フィードバックと間接的フィードバックを効果的に取り入れたことによって即時性のあるフィードバックを行うことができた。対面式の授業と同様な学習環境を整えることが可能になり、e-Learnging を十分に活用することができたと思われる。

本実践に参加した学習者の授業評価アンケートからは、授業に対する満足度が非常に高く、学習者自身が自主的に学習を行うことができたことが分かった。授業参加中に効果的に学習に取り組むことができたと回答していた。特に、教師に質問がしやすく学習した授業内容について確認しやすかったという回答が見られたが、授業開始前に NUCT を活用して学習者の自律学習に対するフィードバックが功を奏した結果であると考えられる。[2]

前述したように、筆者は Moodle や manaba を使った e-Learning 教育の経験を有しているが、対面式授業の補助的なものとして利用していたため、学習者の自律学習を促進するための主なツールとしては十分な活用ができていなかった。今回の実践を通して、今後の対面式の授業に e-Learning システムを導入し、有効な学習支援を行うための方法が見出せたのは大変意義深い。2020年度の世界的なオンライン授業の普及は今後の

e-Learning 学習の新たな可能性を見出し、さらに発展していくものと思われる。世界中の日本語学習者のニーズに応えられるような効果的なオンライン日本語学習法の開発は今後の課題としたい。

注

1．『レベルアップ日本語文法（中級）』の第13課から第24課までの文法項目は以下の通りである。

第13課　授受表現
第14課　尊敬語・謙譲語
第15課　尊敬表現・謙譲表現・丁寧表現
第16課　否定表現
第17課　仮定表現
第18課　複合動詞
第19課　自動詞と他動詞
第20課　結果・状態
第21課　受身
第22課　使役・使役受身
第23課　推量・伝聞
第24課　判断・義務

2．NP 6 文法クラスにおける NUCT の利用とフィードバックの効果については本論集の石崎研究ノート（「中級のオンライン日本語授業の受講者の満足度に影響を及ぼす諸要因―担当教師のインタビューを通して―」）を参照されたい。

参考文献

大関浩美（2015）『フィードバック研究への招待』くろしお出版
白畑知彦（2015）『英語指導における効果的な誤り訂正』大修館書店
鈴木秀明・榎陽子・許明子（2012）「中級レベル文法クラス実践報告」『筑波大学留学生センター日本語教育論集』第27号、153-169
許明子･鶴町佳子（2009）「日本語学習者の中級レベル観」『筑波大学留学生センター日本語教育論集』第24号、19-36
許明子・宮崎恵子（2013）『中級レベルアップ日本語文法』くろしお出版

許明子・田中裕祐・陳一吟・中山健一・古川雅子・三木杏子（2015）「manaba を活用した中級文法クラスの実践報告―運用力向上を目指した文法クラスの実践を通して」221-239